

『銀河鉄道の夜』から (5) カンパネルラの死をめぐる

藤原 道夫

銀河鉄道の座席からカンパネルラが忽然と姿を消し、ジョバンニはひどく驚きとても悲しむ。現実世界に戻ると、カンパネルラが友を助けようとして川に入り流されたことを知る。

カンパネルラの死について、本人を含めて3人の立場から思いめぐらしてみよう。

ジョバンニの驚きぶりについてはシリーズ(3)で述べた。自分の経験でも、少年時代に同級生を失うのは確かに仰天することだった。しかしジョバンニは間もなく両親と揃った日々の生活を送るようになる。悲しい思いは次第に癒されていくだろう。「過ぎ去ったことや失ったもののことより今いる人たちのことが大切だ」とパルバースが指摘するとおりだ。

次にカンパネルラの父親。博士でもあり、極めて冷静に対処している。普通の父親なら早々と「もうだめです」とは言えない、懸命に探し続けるだろうし、我が子がどこからかひょっこり現れる幻想を拭いきれまい。博士はジョバンニが近寄ると「どうもありがとう」と礼を言い、「明日放課後に皆さんでうちに寄ってください」と声をかける。すでに我が子の犠牲を受け入れ、悲しみを乗り越えているかのようだ。これは賢治の理想像なのかも知れない。

最後にカンパネルラ自身。白鳥の停車場に近づく頃に言う「おっかさんは、ぼく(の死)をゆるして下さるだろうか」。母親はどうに亡くなっている。「ぼくはおっかさんが、ほんとうに幸いになるなら、どんなことでもする」、また「誰だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだね」とも言う。しかしほんとうの幸いについて分かりかねている様子。カンパネルラの最後は、幸せどころか悲劇に思える。母親は嘆くのではなからうか。

前に挙げた二つのエピソードを含めて自己犠牲をどう考えるか、パルバースは「誰にでもできることではない。世界を自分なりにとらえ、自分にできることを実際の行動に移してゆく、これが賢治の残したメッセージだ」と無難な答えを出す。しかし、賢治はカンパネルラの死に深い思いを込めていたように思えてならない。彼にとって自己犠牲は、悲劇といわれようと、ほんとうの幸せに至る選択肢だった。では犠牲者はどのように救済されるのだろうか？この点については思いあぐねたようでは言及しておらず、読者に考える余地を残している。